クルアーンと ハディース

Introduction to Holy Qur'an and Hadith

تعريف بالقرآن والحديث

Islamic Center - Japan

クルアーンとハディース

目次

クルアーン・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

クルアーンからの抜粋・・・・・・・・・・・・8

ハディース・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

ハディースからの抜粋・・・・・・・・・・・・18

慈悲あまねく慈悲深きアッラーのみ名において

クルアーン

マッカに生まれたムハンマド（彼に平安あれ）は、その正直さと親切心により人々に信頼され、深く愛されていました。愛する妻子にも囲まれ、楽しく恵まれた生活でしたが、そこには心のいらだちが一抹の影を落としていました。自部族の偶像崇拝とそれにまつわる下劣な慣習などにうんざりし、社会的退廃に悩んでいたのです。彼は４０才に達したころ、マッカに近いヒラーの洞窟にこもるようになりました。

ラマダーン月のある夜のこと、いつものように彼が洞窟にこもって一心に唯一の神に祈っていると、突然大天使ジブリール（ガブリエル）が出現し、彼に「読め」と命じました。おそれおののいた彼は「読むことができません」と答えましたが、天使はまだ「読め」と言います。三度目に同じ答えを返すと天使は彼を強く抱きしめ、こう言いました。

読め、「創造されるお方、あなたの主の御名において。
一凝血から、人間を創られた。」
読め、「あなたの主は最高の尊貴であられ、
筆によって（書くことを）教えられた御方。
人間に未知なることを教えられた御方であられる。」
（クルアーン第９６章１～５節）

この言葉を最初として、西暦６１０年に預言者ムハンマド（彼に平安あれ）に対するクルアーンの啓示が始まったのです。至高なるアッラーの啓示は、その後ムハンマド（彼に平安あれ）が西暦６３２年にこの世を去るまで、２３年間にわたって続きました。

この啓示は一冊の本になり、世界の歴史に多大な影響を与えてきました。これほど多くの人々に、これほど永い年月にわたって「人間はなぜ生まれてきたのか」「人生の目的とは何か」「人はどのように生きればよ

いのか」などの人間の基本的な問いに、これほど明確な回答を与えてきた書物はありません。クルアーンは、今なお十億の民を導くイスラームの最も重要な啓典であり、至高なるアッラーの恵みの現れであり、全人類への導きと知恵を美しく表わす至高なるアッラーの御言葉なのです。

人類を含めた世界中のあらゆるものを創造されたのは唯一の神であり、それをアラビア語でアッラーといいます。至高なるアッラーは人間を創造した後で放っておかれはしませんでした。人間を導かれるために、それぞれの時代に、それぞれの民族に使者を送られました。彼らを預言者（アラビア語でナビー）と言います。預言者の中には至高なるアッラーの啓典をもらった人が何人かいます。預言者の中で啓典をもらった人々を特に使徒（アラビア語でラスール）といいます。啓典には、ムーサー（モーゼ・彼に平安あれ）のタウラート（トーラー）、ダーウード（ダビデ・彼に平安あれ）のザブール（詩編）、イーサー（イエス・彼に平安あれ）のインジール（福音書）などがあります。預言者ムハンマド（彼に平安あれ）は最後の預言者であり、最後の使徒です。そしてクルアーンは最後の啓典であり、全人類に対する導きなのです。

クルアーンとはアラビア語で「読誦するもの」という意味です。クルアーンは至高なるアッラーから大天使ジブリールを通じて預言者ムハンマド（彼に平安あれ）へと啓示されました。ですから初期のムスリムたちにとって、クルアーンとは声に出して読むものであり、暗記するものでした。現在でも世界中のムスリムたちはクルアーンを読誦し、暗記することに喜びを感じています。それは詩でも歌でもなく、しかしその旋律は聴く者の心を惹き付けるのです。預言者ムハンマド（彼に平安あれ）がマッカで反対者に迫害されていたとき、イスラームの敵でさえも、クルアーンの美しさを認めていました。

ムハンマド（彼に平安あれ）がいた当時のアラブ社会は、当時の文明国だった東ローマ帝国やペルシャ帝国に比べて非常に遅れていました。しかしそんな中でも唯一、文学だけは発達しており、多くの者が文盲で

あったにもかかわらず、詩や物語を愛好し、家族や親戚や仲間たちと集まった時は互いに朗唱し、また競い合っていました。最優秀作品は、カアバ神殿の壁に貼りだされました。

アッラーはクルアーンでこう語っておられます。

もしあなた方が、わがしもべ(ムハンマド)に下した啓示を疑うならば、
それに類する一章でも作ってみなさい。
もしあなた方が正しければ、
アッラー以外のあなた方の証人を呼んでみなさい。
もしあなた方が出来ないならば、いや、出来るはずもないのだが、
それならば、人間と石を燃料とする地獄の業火を恐れなさい。
（クルアーン第２章２３～２４節）

クルアーンの章の中には、わずか３節しかないものもあります。預言者ムハンマド（彼に平安あれ）と同時代の人々の中には、アラビア語と文学の大家として知られた人たちがおり、彼らはこの挑戦に応えようとしたのですが、その内容と表現力においてクルアーンと同様のものをわずか数節さえも作ることはできませんでした。

クルアーンは預言者ムハンマド（彼に平安あれ）の人生とともに啓示されました。なにか出来事が起こると、それに対してアッラーの回答としてクルアーンの一節が下る、というのが常でした。にもかかわらず、クルアーンは、その内容が首尾一貫していて、どの部分も互いに矛盾することがありません。

少しも曲ったところのない、アラビア語のクルアーンで、
必ずかれらはわれを畏れること（を知る）であろう。
（クルアーン第３９章２８節）

クルアーンは預言者ムハンマド（彼に平安あれ）に啓示されて以来、

一言一句たりとも変わっていません。以前の諸啓典は、宗教の戒律を嫌う人々によって書き換えられたり、失われたりして、正しく伝わりませんでした。しかし、クルアーンは現在にいたるまで、預言者ムハンマド（彼に平安あれ）が啓示を受けたときのままです。それは次の様な過程を経て伝えられたからです。

預言者ムハンマド（彼に平安あれ）は、天使ジブリールのもたらした啓示を完全に記憶するまで復唱させられ、その啓示を挿入する場所をはっきりと示されました。クルアーンの章節の順序は、啓示された時期とは関係なく、アッラーの定めた順序に従っています。

預言者ムハンマド（彼の平安あれ）は読み書きができなかったので、アッラーの啓示を受けるとすぐ、読み書きのできる教友にそれを書き留めさせました。筆記者がそれを読み返し、預言者（彼に平安あれ）の校正を受けてから、預言者（彼に平安あれ）の指示によって啓示は所定の場所におさまりました。

預言者ムハンマド（彼に平安あれ）の存命中にすでにクルアーン全巻を暗記していた 5 人の教友がいます。彼らはムアーズ・ビン・ジャバル、ウバーダ・ビン・サーミト、ウバイ・ビン・カアブ、アブー・アイユーブ、アブー・ダルダー（彼ら全てにアッラーのお喜びがありますように）です。

ヤマーマの戦いにおいて、多くのクルアーン暗記者が戦死し、純粋なクルアーンが失われてしまうことを危惧した後の二代目カリフ（預言者の後継者）ウマル・ビン・ハッターブ（彼にアッラーのお喜びがありますように）は、初代カリフのアブー・バクル（彼にアッラーのお喜びがありますように）にクルアーンを一冊にまとめることが急務であることを提案しました。そこでアブー・バクルは主だった教友たちと相談してから、啓示の主任筆記者であったザイド・ビン・サービト（彼にアッラーのお喜びがありますように）にクルアーンの全巻を集めるように命じました。準備が整ったとき、預言者ムハンマド（彼に平安あれ）のおられた時とまったく同じようにクルアーンを一冊にまとめるための監修委員会が設けられ、クルアーンの全巻が集められました。この基本テキ

ストは、クルアーンを書き留める作業をしていた５人を含めた多くの教友たちの校正を受け、完全であると確認されました。この原本は預言者（彼に平安あれ）の未亡人で二代目カリフ・ウマルの娘ハフサ（彼女にアッラーのお喜びがありますように。彼女自身がクルアーン暗記者でした）のもとで保管されました。

二代目カリフ・ウマル（彼にアッラーのお喜びがありますように）は、イスラーム圏全土にわたってクルアーンを教える学校を設立しました。そのうちの一つダマスカスのモスクで、アブー・ダルダー（彼にアッラーのお喜びがありますように）は１６００人の生徒に教えていました。また、カリフは地域の総督に、クルアーンの全章句を暗誦できる者を教師としてマディーナへ派遣することを要請しましたが、これに対して、たとえばイラク総督のサアド・ビン・アビー・ワッカース（彼にアッラーのお喜びがありますように）は「そういった者は３００人もいる」と返事をしています。

三代目カリフ・ウスマーン・ビン・アッファーン（彼にアッラーのお喜びがありますように）の時代には、イスラーム地域の拡大にともない、アラブ人以外の入信者が増え、かれらのクルアーンの発音はゆがめられていました。これを正すため、ウスマーン（彼にアッラーのお喜びがありますように）は博学の教友たちの意見を聞き、ザイド・ビン・サービト（彼にアッラーのお喜びがありますように）を中心とする４人の委員会を設けました。ハフサ（彼女にアッラーのお喜びがありますように）の保管する原本の正確な写本を帝国全土に配り、預言者の読誦と同一のクライシュ語が使われるよう、定めました。クルアーンを正しく読むために後世になって挿入された正字法（発音記号）は別として、現在出版されているクルアーンの内容は、預言者ムハンマド（彼に平安あれ）が伝え、ウスマーンと預言者の教友たち（彼らにアッラーのお喜びがありますように）が配布したクルアーン全巻の正本とまったく同じものです。

そして、現在まで多数のムスリムがこれを暗記しています。世界中には数えきれないほど多くのクルアーン暗記者がいます。

これらの事実から、多くの学者はクルアーンが預言者ムハンマド（彼

に平安あれ）の指示によって書き留められ指定された配列の通りのものであると認めています。全ムスリムはもちろん、学者や違う宗教の人間までもが、クルアーンのオリジナリティーを確証しています。すなわちクルアーンには何も書き加えられず、何も削除されず、どんな改ざんもされていないのです。これは歴史的な事実なのです。クルアーンの純正さの守護は、至高なるアッラーご自身によって約束されているとおりなのです。

本当にわれこそは、その訓戒を下し、必ずそれを守護するのである。
（クルアーン第１５章９節）

クルアーンは１１４の章に分かれ、それぞれに名前がついています。例えば「純正章」はアッラーの唯一性を扱っていることによります。１１４章のうちの９３章はマッカで、２１章はマディーナで預言者（彼に平安あれ）に啓示されました。最も短い章（第１０３、１０８および１１０章）はそれぞれ３節ずつ、一番長い章である第２章雌牛章は２８６節に分かれ、全巻を通して６２３６節あります。全ての章がマッカ啓示・マディーナ啓示に分類されています。ただし全てが一時に啓示されたわけではなく、長い章など順序も相前後して数節ずつ啓示されたので、一つの章の中でマッカ啓示とマディーナ啓示とが混ざっているものもありますが、その場合、分量の多い方に分類されています。これらの分類や順序はすべてアッラーの啓示に基づいており、預言者（彼に平安あれ）やその他の人の考えで並べたわけではありません。また、その他にも、読誦しやすくするためにクルアーンをおおよそ同じ長さに３０等分する分け方もあり、その３０分の１をジュズと呼びます。それで１日に一ジュズ読めば、１ヶ月で全クルアーンを読了することになります。

クルアーンを読むときは、身を清め、「アウーズビッラーヒ、ミナッシャイターニッラジーム（呪うべき悪魔からのアッラーの守護を願う）」「ビスミッラーヒッラフマーニッラヒーム（慈悲あまねく慈悲深きアッ

ラーの御名において)」を唱えて始めます。読誦には集中し、延ばすべき個所で延ばし、止まるべき個所で止まって、ゆっくりと美しい声で読むべきです。一時にたくさん読むよりも、たとえ少なくても毎日決めた分量を読む方が良いです。

クルアーンからの抜粋

言え、「かれはアッラー、唯一なるお方であられる。
アッラーは、自存され、
お産みなさらないし、お産れになられたのではない、
かれに比べ得る、何ものもない。」
（クルアーン第１１２章１～４節）

それこそは、疑いの余地のない啓典である。
その中には、主を畏れる者たちへの導きがある。
（クルアーン第２章２節）

アッラー、かれの外に神はなく、永生に自存されるお方。
仮眠も熟睡も、かれをとらえることは出来ない。
天にあり地にある凡てのものは、かれの有である。
かれの許しなくして、誰がかれの御許で執り成すことが出来ようか。
かれは、（人びとの）以前のことも以後のことをも知っておられる。
かれの御意にかなったことの外、かれらはかれの御知識について、
何も会得するところはないのである。
かれの玉座は、凡ての天と地を覆って広がり、
この二つを守って、疲れも覚えられない。
かれは至高にして至大であられる。
（クルアーン第２章２５５節）

かれが泥からあなたを創られたのは、かれの印の一つである。

見るがいい。やがてあなた方人間は（繁殖して地上に）散らばった。
またかれが、あなた方自身から、あなた方のために配偶を創られたのは、
かれの印の一つである。
あなた方は彼女らによって安らぎを得るよう（取り計らわれ）、
あなた方の間に愛と情けの念を植え付けられる。
本当にその中には、考え深い者に対する印がある。
またかれが諸天と大地を創造され、あなた方の言語と肌色を
さまざま異なったものとされているのは、かれの印の一つである。
本当にその中には、知識ある者への印がある。
（クルアーン第３０章２０～２２節）

天にあり地にある凡てのものは、アッラーを讃える。
（かれは）至高の王者、神聖にして偉力ならびなく英明であられる。
かれこそは文盲の者の間に、彼らの中から使徒を遣わし、
印を読み聞かせて彼らを清め、啓典と英知を教えられたお方である。
本当にかれらは、以前は明らかに邪道にあった。
まだ来ていない（預言者以降の）人びとにも教えを授けられる。
かれは偉力ならびなく英明であられる。
これがアッラーの恩恵である。
かれの御心にかなう者にこれを与える。
アッラーは、偉大な恩恵の主であられる。
（クルアーン第６２章１～４節）

人間には、なにものとも呼べない長い時期があったではないか。
本当にわれは、彼を試みるために混合した一滴の精液から人間を創った。
それでわれは聴覚と視覚を彼に授けた。
われは人間に（正しい）道を示した。
感謝する者（信じる者）になるか、信じない者になるか、と。
（クルアーン第７６章１～３節）

様々な欲望の追及は、人間の目には美しく見える。
婦女、息子、莫大な金銀財宝、
（血統の正しい）焼き印を押した馬、
家畜や田畑。これらは現世の生活の楽しみである。
だがアッラーの御側こそは、最高の安息所である。
（クルアーン第３章１４節）

人間は、その努力したもの以外、何も得ることはできない。
（クルアーン５３章３９節）

かれこそはあなた方を地上の代理者となされ、
またある者を他よりも高められる御方である。
それは与えたものによって、あなた方を試みられるためである。
あなたの主は懲罰する際は極めて速い。
しかし、本当にかれは寛容にして慈悲深くあられる。
（クルアーン第６章１６５節）

順境においてもまた逆境にあっても（主の贈物を施しに）使う者、
怒りをおさえて人々を寛容する者、
本当にアッラーは善い行いをなす者を愛でられる。
（クルアーン第３章１３４節）

あなた方信仰する者たちよ。
証言するにあたってはアッラーのために公正を堅持しなさい。
たとえあなた方自身のため、
または両親や近親のため（に不利な場合）でも、
また富者でも貧者であっても（公正であれ）。
アッラーは（あなた方よりも）、双方にもっと近いのである。
（クルアーン第４章１３５節）

正しく仕えるということは、
あなた方の顔を東または西に向けることではない。
つまり正しく仕えるとは、アッラーと最後の（審判の）日、
天使たち、諸啓典と預言者たちを信じ、
かれを愛するためにその財産を、近親、孤児、貧者、旅路にある者や
物乞いや奴隷の解放のために費やし、礼拝の務めを守り、
定めの喜捨を行い、約束したときはその約束を果たし、
また困苦と逆境と非常時に際しては、よく耐え忍ぶ者。
これらこそは真実な者であり、またこれらこそ主を畏れる者である。
（クルアーン第２章１７７節）

慈悲あまねく慈悲深きアッラーのみ名において。
万有の主、アッラーにこそ凡ての称讃あれ、
慈悲あまねく慈悲深きお方、
審判の日の主宰者に。
わたしたちはあなたにのみ崇め仕え、あなたにのみ御助けを請い願う。
わたしたちを正しい道に導きたまえ、
あなたが御恵みを下された人々の道に、
あなたの怒りを受けし者、また踏み迷える人々の道ではなく。
（クルアーン第１章１～７節）

アッラーは誰にも、その能力以上のものを負わせられない。
（人びとは）自分の稼いだもので（自分を）益し、
その稼いだもので（自分を）損う。
「主よ、わたしたちがもし忘れたり、過ちを犯すことがあっても、
咎めないで下さい。
主よ、わたしたち以前の者に負わされたような重荷を、
わたしたちに負わせないで下さい。
主よ、わたしたちの力でかなわないものを、担わせないで下さい。
わたしたちの罪障を消滅なされ、わたしたちを赦し、

わたしたちに慈悲を御下しください。
あなたこそわたしたちの愛護者であられます。
不信心の徒に対し、わたしたちを御助け下さい。」
（クルアーン第２章２８６節）

布教を始めてから２３年目に預言者ムハンマド（彼に平安あれ）はマッカへの巡礼を行いました。その期間に以下の啓示が下りました。それは、イスラームが完成すると同時に、ムハンマド（彼に平安あれ）の預言者としての役目が終わり、彼がこの世界を去る日が近づいていることを暗に告げるものでした。この啓示の後、アッラーの命令や宗教の規則に関する啓示は来なくなり、数ヶ月後にムハンマド（彼に平安あれ）はその生涯を終えたのです。

今日われはあなた方のために、あなた方の宗教を完成し、
またあなた方に対するわれの恩恵を全うし、
あなた方の教えとしてイスラームを選んだのである。
（クルアーン第５章３節）

ハディース

ハディースとは「言われたこと」または「報告」という意味であり、一般的な使い方としては預言者ムハンマド（彼に平安あれ）の実践（スンナ）と、彼が実行したこと、発言したこと、あるいは他の人物が行うのを容認したことの記録（ハディース）を指します。

「スンナ」というアラビア語は「慣習」という意味です。イスラームで「スンナ」といった場合、一般的には預言者ムハンマド（彼に平安あれ）の実践を指します。これについてクルアーンでは次のように述べています。

本当にアッラーの使徒は、アッラーと終末の日を熱望する者、アッラーを多く唱念する者にとって、立派な模範であった。
（クルアーン第３３章２１節）

イスラームにはイバーダ（崇神行為）という言葉があります。それはあらゆる宗教的な行いを指し、礼拝はもちろんのこと、クルアーンの読誦や巡礼に行くことのみならず、食べ方、飲み方、生活の仕方といった私たちの日常の些細なことに至るまで、もし私たちがアッラーの満足を求めて預言者ムハンマド（彼に平安あれ）のやり方で行えば、その行為そのものが至高なるアッラーに対する祈りであるとされます。なぜなら至高なるアッラーは、ムハンマド（彼に平安あれ）を人類の手本として送られたからです。

使徒に従う者は、まさにアッラーに従う者である。
（クルアーン第４章８０節）

ですから、ムスリムにとってスンナを実践することは単に１４００年前のアラブ人の習慣を真似すると言うことではなく、至高なるアッラーを崇拝する行為なのです。

そこで、一体何がスンナで何がそうでないかということがとても重要になってきます。スンナは、実際には預言者ムハンマド（彼に平安あれ）が預言者として言ったこと、行ったこと、預言者に接した人々が行うことに対し、預言者（彼に平安あれ）が一部始終をご覧になっていたのにもかかわらず、それを黙認した行いなどです。

預言者ムハンマド（彼に平安あれ）は人が行うべき行為（スンナ）と、そうでないものを区別していました。そしてスンナは預言者の教友による実践と預言者（彼に平安あれ）の言葉の伝承によって人から人へ伝えられました。

預言者（彼に平安あれ）が何か言ったり行動したりしたことを見聞した教友は、それを他の人に伝え、さらにそれを聞いた人は次々と他の人々に伝えました。後世になって、多くのハディースが編纂されたとき、その一つ一つは伝承者によって、例えば「アッラーの使徒はこのように言われたとアブー・フライラが言ったのをＡが聞き、それをまたＡからＢが聞いたとＣが言っている･･･」という具合に伝えられ、本文がその後にきます。このようなやり方で、ハディースは伝えられています。イスラームの初めから、教友たちは預言者（彼に平安あれ）を模範とし、その道を歩むために彼の言行を一生懸命に学びました。

預言者（彼に平安あれ）の死後、イスラームの勢力が遠く離れた地まで広がったとき、新しく入信した者たちは同じように預言者（彼に平安あれ）について全てのことを知り、彼を模範にしようと強く願っていました。教友たちは新しい信者たちから預言者（彼に平安あれ）について熱心に質問され、時が経つにつれて預言者（彼に平安あれ）に関する多くの資料が広く一般に知れ渡りました。それが人々の口から口へと広く伝えられるようになり、ある人たちは自分たちが使う目的で小さなハディース集を作りました。これらはまだ本とは呼べないほどのものでしたが、その内容は後にまとめられたハディース集に加えられました。

ハディースは全てその伝承者と同時に、それを裏付ける内容が伴わなくてはなりません。現代では権威あるハディース集が多く印刷されてい

て、広くこれを求めることができるので、伝承の信頼性についてはあまり気を使わずにハディースを引用することができます。ハディースの例を一つ見てみましょう。

信者たちの長（カリフのこと）、ウマル・ビン・ハッターブ（アッラーが彼にお喜びであられますように）の権威によると、アッラーの御使い（彼に平安あれ）はこう言われた。
行為とは、意志に基づくものであり、人は皆、自らの意思した事柄の所有者である。したがってアッラーとその預言者のために聖遷に参加した者は、アッラーとその預言者のために聖遷を行ったのであり、現世の利益、結婚相手の女のために聖遷に加わった者は、それらのために聖遷を行ったのに過ぎない。

このハディースは、ハディース学の大家である二人のイマーム、アブー・アブドゥッラー・ムハンマド・ビン・イスマーイール・ビン・イブラーヒーム・ビニル・ムギーラ・ビン・バルディズバ・アル・ブハーリーと、アブル・フサイン・ムスリム・アル・クシャイリー・アンナイサーブリーの各「サヒーフ」中に記載されています。ちなみにこの両「サヒーフ」は、伝承集の中で最も信頼性の高いものだという評価を受けています。このように、ハディースは本文とその伝承者の系列、信頼度などがひとまとめになっています。これらの伴わない伝承はハディースとは言いません。

イスラームにおいては、まず第一にクルアーンがイスラーム法の基本精神で、次にスンナがその具体化です。例えて言えばクルアーンは憲法で、ハディースは民法や刑法などの一般の法律です。例えばクルアーンの中に「礼拝を確立せよ」という節が何回も出てきますが、実際の礼拝の詳しいやり方はありません。それらは全てハディースの中にあるのです。預言者ムハンマド（彼に平安あれ）は人類の手本なのです。クルアーンがどういう意味かを解説したのがハディースです。このことは預言者の教友たち、全てのイスラーム法学者、そしてそれらの後継者である

全ての世代のムスリムが認めています。

ハディース集はたくさんありますが、最も権威あるハディース集は次の２つです。

1、『サヒーフ・ブハーリー』ブハーリー
（イスラーム暦１９４年～２５６年）編
2、『サヒーフ・ムスリム』ムスリム
（イスラーム暦２０２～２６１年）編

さらに次の４冊も権威あるものとして認められていて、前記の２冊を加えて「６冊の正統ハディース集」と呼ばれています。

3、『アブー・ダーウード』アブー・ダーウード
（イスラーム暦２０２～２７５年）編
4、『ティルミズィー』ティルミズィー
（イスラーム暦～２７９年）編
5、『ニサーイー』ニサーイー
（イスラーム暦２１５～３０３年）編
6、『イブン・マージャ』イブン・マージャ
（イスラーム暦２０９～２７３年）編

この「六冊の正統ハディース集」を含めて、全てのハディース集は編集者の独自の判断により作成されたもので、学会や教会などの組織の力で作られたものではありません。これは、イスラームではそのようなものに対して権威を与える特定の組織など存在しないからです。

全てのハディースは厳しく調べられ、イスラーム社会全体で認められて初めて権威あるものとして認められたのです。他のハディース集同様、『サヒーフ・ブハーリー』や『サヒーフ・ムスリム』にも、この方法が使われました。

預言者ムハンマド（彼に平安あれ）に関する膨大な数の伝承や記録の信頼性を判定するために、特定の基準が定められました。例えばブハーリーは『サヒーフ・ブハーリー』の編纂にあたって６０万ものハディースを集めましたが、厳しく審査し、わずか７２７５だけを取り入れました。このように、膨大な数のハディースが信頼性が低いとしてハディース学者の手によって捨てられました。そのようにして、ハディース学という研究が徐々に発展していき、それぞれの伝承の信頼性を判定するための基準が定められていきました。

例をあげますと、第一に、多くの伝承者のつながりが最終的にはそのことを預言者から直接見聞きしたという人までさかのぼっていること、第二に、その伝承者のつながりの中で、それぞれの人物の確かさ、人格、行動、記憶力の正確さ、見聞きしたことに対する理解力、信頼性、教養などについて十分に調査してあることなどです。

何千人という多くのハディース学者たちが、預言者（彼に平安あれ）の言行を伝えた人たちの生涯に関するあらゆる情報を一生をかけて集めました。預言者（彼に平安あれ）のハディースをこれほどまで厳しく審査したのは、イスラームの真の教えを知るために当然のことだといえるでしょう。

審査の基準について、クルアーンでは次のように述べられています。

信仰する者よ、もし邪な者が情報をあなた方にもたらしたならば、
慎重に検討しなさい。
（クルアーン第４９章６節）

ハディースはその信頼度によって、普通次の三つのグループに分けられています。

・サヒーフ（信頼度：優）
・ハサン（信頼度：良）
・ダイーフ（疑わしい）

ブハーリーとムスリムが認証したハディースは全てサヒーフだと言われています。また、ブハーリーとムスリムが集めたものでなくても、この二人のハディース学者の一方か両者が定めた条件を満たしたものも、サヒーフとされます。

ハサンとされるハディースは、その出典の根拠がよく知られており、伝承者が信頼できる人として人々に知られており、また伝承された話をほとんどの学者が認め、法学者、裁判官、法律家などが使ったものです。ハサンのハディースは、イスラームの法的決定の有効な根拠として認められています。一方ダイーフのハディースはそうではありません。しかし、ダイーフのハディースの全てが否定されるわけでもありません。ダイーフの中でも、人々に善行を勧めたものや、信頼度の高いハディースに述べられているある事件に付随したことについて語っているものは、採用してもよいとする学者もいます。アブー・ダーウードという学者は、自分が扱った何かのことを証明するのに、ほかに何も資料がないときには、しばしばダイーフのハディースを引用しています。

ハディースからの抜粋

イブン・ウマルは語っている。
アッラーの御使い（彼に平安あれ）は言われた。
イスラームは五つの柱からなっている。
「ラー・イラーハ・イッラッラー、ムハンマド・ラスールッラー（アッラーのほかに崇拝に値するものはなく、ムハンマドはアッラーの使徒である）」と証言すること、礼拝を確立すること、ザカートを支払うこと、ハッジを行うこと、断食を行うことである。

アブー・フライラが語っている。
預言者（彼に平安あれ）は言われた。
信仰には６０以上の部門がある。そしてアル・ハヤー（慎み・謙虚さ）は信仰の一部である。

アブー・フライラが語っている。
預言者（彼に平安あれ）は言われた。
宗教は非常に易しい。誰でも自分の能力以上の重荷を課す者はその道を続けることができなくなる。だから極端であってはならない。完全にできるように努力し、報奨への吉報を受けなさい。そして朝、午後、夜の最後に礼拝し続けることによって、強さを得なさい。

アブー・サイード・アルクドリによって語られている。
アッラーの御使いは言われた。
もし人が真剣にイスラームを受け入れたなら、アッラーは彼の以前の罪を全て許して下さる。そしてその後は清算をやり直し、おのおのの善行に対しては７００倍の報奨を与えられ、悪行に対してはそのままである。しかしアッラーがお許しになれば別である。

ムアーズ・ビン・ジャバルによって伝えられている。
アッラーの御使いは言われた。
「ラー・イラーハ・イッラッラー（アッラーのほかに崇拝に値するものはない）」と信仰告白することは天国の鍵をもたらす。

المر كز الاسلامي في اليابان